

第101号
平成29年
7月号

HPに 創刊号から
連載中

もう一つの道

情報は、うのみにせず、注意深く徐々に試して下さい。

山田整骨院
熊本市中央区出水 4-25-1
096-364-7611

<http://yamadasu.com/>

熊本交通事故, 山田整骨院

検索

<http://www//jiko-kumamoto.net/>

生体一者と症状即療法(3)

医学博士 渡辺 正 月刊西医学 昭和50年6月

自然良能作用（自然回復のしくみ）というのは、例えば体内にばい菌が入っても白血球がこれを食い殺そうとするし、免疫体がそれを弱らせようとする。血管が破れてもそれは収縮し、血液は凝固することによって出血を少なくしようとする。そして切れた皮膚は肉芽によって再び修理再生される。

これらはみな自然良能作用（自然回復のしくみ）であって、生体の特有の生命力の発現である。これに反し、壊れたラジオが再び鳴り始めることはない。そこに機械とは異なる、生体の自然良能作用（自然回復のしくみ）があるのだ。

しかし自然良能作用が治癒過程として発現する症状、即療法には自ら限度がある。もし自然良能作用が絶対的のものであれば、病気になった場合、われわれはクスリもいらない注射もいらないし、医者なども不用の筈である。おそらく野生の動物は、このような境涯にあるものと思われる。

西式では自然良能作用を高めることによって、疾病は自ら治癒するものという立場に立ち、そしてまた自然良能作用を高める方法として六大法則が創案されている。西式でいう自然良能作用とは、ただ単に観念的で目的論的な非科学的な考え方ではなく、自然良能作用も、生体の一種の反応作用であって、その反応様式が生物学的な適者生存の法則に適合した場合、それが自然良能と認識されるものと考えている。

さらにこの問題を掘り下げてゆけば、自然良能（自然回復のしくみ）は生体の内外分泌に関係するものであることが分る。

◎症状即療法の先達者

西洋医学の祖といわれるヒポクラテスも「自然が治癒し医師が処置する」と唱え、また、「医とは自然の治癒機転を模倣する術なり」ともいっている。さらに医家に対して教えているのである。診断に際して自分の経験が浅く、有効な処置法をとり得ない時は、むしろ自然の成りゆきにまかせて、「先ず害するなかれ」と。

ヒポクラテスこそ症状即療法の考え方の先達者ということができる。現代医学の医師達はクスリを乱用して、クスリの副作用による医原病を急増させている現状を反省して、ヒポクラテスの「先ず害するなかれ」の言葉を味おう必要がある。

十七世紀の英国にあって「英国のヒポクラテス」と呼ばれたシデナムは「疾病とは、疾病を惹起する物質を除去することによって、患者の健康を回復させる自然の努力に外ならない」と述べている。

東洋においては孔子の『書経』に、「薬瞑眩せざればその疾いえず」とあるが、その意味は、クスリを飲んで、クスリが症状を現わさなければすなわち症状を誘発しなければ、病気が治らぬというのである。

いわば、クスリを飲むと、当然発すべき症状を誘発させるのである。

◎これが瞑眩である

瞑眩とは、症状即療法ということである。

何人も熱が出たといっちは騒ぐが、熱発も症状即療法であって、喜ぶべき現象である。

ドイツの自然療法家ブラウフレは「われに熱を誘発する方を与えよ、さらば、余は如何なる疾病をも快癒せん」と豪語している。

中国の神医扁鵲は、はたのものの目には再起不能と見られる病人を治してやり、「自ら生くべき者をして我これを起たしむるのみ」を述べ、生きる力を本人がもっていたから生きられたのだ。何も扁鵲の力ではないと謙遜している。

キリストも多くの病人を治したが、その生きる力を神の力に帰している。神の力が病人の中に現われたと観て、注射や高価薬で治ったとはいわないのである。

◎自然良能を無視する現代医学 医原病の恐怖

現代医学の根本的欠陥は、生体の自然良能作用（自然回復のしくみ）を無視して治療を行うことにある。すなわち、症状即療法の観点をもてず、症状はすなわち疾病と考えて、クスリを用いて症状を抑えることに汲々としているのである。その行きつくところ、強いクスリを使用することになり、クスリの副作用によって、かえって疾病をつくるという矛盾を生むに至った。これを医原病という。医薬によってひきおこされる病気ということである。

サリドマイド（睡眠薬）による奇形児の誕生、キノホルム服用によるスモン病、副腎皮質ホルモン（ステロイドホルモン）の連用による副作用（胃潰瘍ができたり、糖尿病を誘発したり、体内の電解質のバランスをくずすなど）精神を狂わせる精神安定剤（アトラキシン）など現代医学の治療はすべてクスリに頼り、クスリの副作用による医原病のために、現代医学は根本的に行詰ってしまった。

これは、生体の自然良能作用を無視して、症状即療法の考え方を否定してきたためである。

今こそ、現代治療医学の根本的誤謬を悟り、生体一者と症状即療法の観点に立って、真の人間のための医学、医薬のいらぬ治療法、自分の力で生命力を強化する健康法、すなわち、西医学健康法こそ一日も早く、普及されなければならない。（おわり）

解 説

現代医学の弱点は 対症療法であるが故に訳のわからない症状に対しては対応出来ないことです。例えば歩いては転ぶ、歩いては転ぶ人がいました。バランスをとる小脳が失調しているとの医師の診断でしたが、それに対する治療法はありませんでした。故甲田光雄医師は生体一者、自然良能の考えに基づき、小脳失調症について自然良能を阻害しているのは宿便と判断して、断食と生野菜療法及びスイマグ（水酸化マグネシウムの下剤）飲用等により宿便を排除して 見事治癒に導きました。不妊という症状に対して現代医学は個々の不妊の原因に対応していますが、西医学健康法は自然良能作用が高まれば 自ずから妊娠につながるという考え方で、六大法則の体操や生野菜療法を推奨します。それにより 50 歳過ぎての妊娠、出産が何例か報告されています。又 弱視の子供さんが六大法則や生野菜食、甘い物を控える等により普通に見えるようになった例もあります。

血圧が高いからという理由で、血液サラサラの降圧剤が処方されて服用し、血圧を下げるというのも症状を抑える治療法です。非常時に薬剤を用いるのは仕方ありませんが、慢性的にいつまでも降圧剤を用いるのはおかしなことです。血液凝固作用をなくすことで血液がサラサラになりますから、出血した場合は血液が固まらずに出血が止まらず危険となります。人間には正常に血液を流し正常に血圧を保つ力があります。野菜やお茶のビタミンCや生水が血管を柔軟にして血液をサラサラにして、血流や血圧を正常にし、且つ血液凝固作用もあります。これも自然良能を高める方法の一つです。